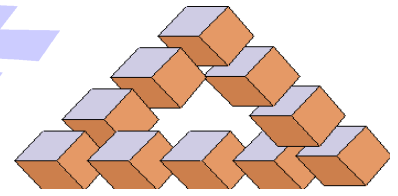


# 会長の御信



No.8 H30.10.3

横浜市小学校算数教育研究会長 小林 広昭

研究主題 「数学的に考える資質・能力を育成する算数科学習」  
～数学的な見方・考え方が成長する学び～

## 表現にこだわる！

30年以上前のことです。怖いもの知らずの若者たちは、自分たちの研究姿勢を棚に上げ、発表すれば力がつく信じ、先輩たちの叱責にめげながらも自主発表することになりました。研究主任は、ベテラン、ミドルにみな断られてしまい、研究の文書なんて、ろくにかけない、もちろん授業だってひどかった3年目の私が、「しょうが無いからあなたがやりなさい。」と校長に言われ、やることになりました。

研究テーマや研究の方向、内容も何も書けない私が、教務主任に何度も赤を入れてもらい、ときには、飲み屋でノート片手に話を聞きながら、作りました。その資料について、講師で来ていただくことになった山田臣一先生に指導していただきました。先生は、資料に書かれていること、一言一言がどのようなことを言おうとしているのか、問われました。「ここに数学的な考え方とあるが、あなたの考えている数学的な考え方とは、どのようなことですか。」「学習過程の中に問題把握とあるが、あなたの考える問題とは、どのようなもので、それを把握するとはどのような状態を指すのか?」「適用・発展とあるが、どのようなことをすることが適用・発展なのか?」・・・ひたすら聞かれ、ただただ、答えられずに汗をかいていたことだけ思い出されます。このとき、先生は、本に書いてあることを写すのではなく、それを授業の中の子どもの姿で語れなければいけないことを言いたかったのだと思います。また、同じ年に指導主事だった金子肇先生には、「小林さん、漢字の熟語ではなく、和語で文書を書くといい。「知識」と言われるより「知っていること」と書いた方が、理解しやすいんだよ。難しい言葉をひらがなで言い換えるようにするといいよ。」と言われました。このことは、数年後附属小学校でも、先輩に「文章は、平明達意、簡単でわかりやすさが大事。難しい学者の理論も、現場の教員の具体的な指導の姿、子どもの姿で語れなければ、本当に理解したことにはならない。」と言われました。

本当にわかっているとは、誰にでもわかるように話せること、具体的な姿で語れることだと思います。

さて、市算研では、今、学習指導要領解説算数編をもとに研究を進めています。

提案資料の「2 単元で育成する資質・能力」の上段には、学習指導要領の内容が記述してあります。それをこの単元の学習として、解釈したものが下段に記述されます。そこが一致しているのか、より具体的な姿として記述されているのかをしっかりと吟味する必要があると思います。そこには、教師としての読解力が求められます。ここがズレてしまうと、研究にならないところです。我流の解釈では、伸びません。研究討議では、主張や論点といったものが話題になると思いますが、その前提となる教材解釈が、ズレていないか、共通理解が図られているか、確認した上で討議を進めてほしいと考えます。

また、裏面の見方・考え方にどのようなことが記述され、それが子どもの姿で語れるか、授業の中で子どもの姿が見えてくるか、記録からその子どもの姿が読み取れるのか、考えていく必要があると思います。さらに、板書の中に、記述される言葉の中に、資質・能力につながる、見方・考え方の具体的な記述があるかどうか、あればそれはどのような手だてによって表出したのか、無ければ、どうすれば、それを表出することができたのか、検討してほしいと考えます。

その際、「これはないんですか。」「これでは、まずいのではないですか。」「質問ですが、どこに記述してありますか。」のように、暗にできていないことを質問の形で聞いたり、ただ、できていないこと、表出していないことをあげつつっても研究は深まりません。「自分ならどうする。」「どこをどう変えることで、どのような違いが出るのか。」逆に、「ここでこのような手だてがあったので、よりよい姿が出てきた。」「課題の提示の工夫が問いを生み、子どもたちのよい表れにつながった。」「学習指導要領から資質・能力の分析解釈、ゴールの描き方がよかったので、問いを引き出すことができ、子どもたちの育ちにつながった。」など、教師のかかわりによってどのような子どもの姿が表れるのかを明確にしていくような話し合いをすることで研究が深まるのではないのでしょうか。

自分事としての主体的で対話的な学びが成立する研究会めざして、がんばっていきましょう。

<この「会長の独り言」は、印刷して配付していただいてもかまいません。>